



フェドラー・ハットにビンストライプのスーツで身を固めた主人公ウィリアムズを演じるビル・ナイ。「生きるLIVING」より。
©Number 9 Films Living Limited

なぜ、『LIVING』と『生きる』は傑作なのか？

対談

ピーター・バラカン × 大森さわこ

(ブロードキャスター)

(映画評論家)

『生きるLIVING』の舞台であるロンドンで生まれ育ったイギリス人と、カズオ・イシグロが五歳まで過ごした長崎の近くで育った日本人にとって、この二つの作品はどのように映るのだろうか？

一九五〇年代初めの東京とロンドンという二大首都で生きる庶民の姿を描いた映画から見えてくる、西洋と東洋の二つの島国の実像にせまる。

バラカン 『生きるLIVING』を見た後に、黒澤明の『生きる』(一九五二)も数十年ぶりに見返したんですけど、どちらもすごくよかったですね。『LIVING』も二回見たんですけど、細かい変更点もよくわかりました。

大森 そうですね。私も大昔に見て、改めてこの機会に見返したんですけど、やっぱりよかったですね。『LIVING』も二回見たんですけど、細かい変更点もよくわかりました。

バラカン 基本のストーリーは同じですよ。大森 そう、ほとんど同じだと思います。

バラカン 一番大きな違いは、黒澤のオリジナル版はまさに同時代を舞台にしています。

大森 うん、そうですね。『LIVING』は『生きる』の公開年の翌年、一九五三年を舞台にしています。

どう思ったのか、すごく興味があります。僕が一歳のときの映画ですからね。

大森 日本でも公開時からすごく評価されて、「ギネマ旬報ベスト・テン」でも日本映画の第一位に選ばれています。外国映画は『チャップリンの殺人狂時代』でした。

バラカン 敗戦からの復興が始まった時代の市役所を舞台に、ある種の官僚主義にとっぷり浸かった無気力な公務員たちが、大事な案件や陳情をひたすらたい回しにして、書類に淡々とハンコを押すだけの日々を送っている。そんな中で、市民課長を務める主人公が、胃がんで余命いくばくもないことを知って生き方をガラッと変えるという物語が、どういうふうを受け止められたのか。この時代の日本のお役所は、僕にとってはまったく未知の世界ですけど、あれは戦前からそうだったのか、それとも戦後になってああなったのか。

大森 私も東京に出てきたのは一九七〇年代なのでわかりませんが、たぶんずっとあの感じはあったんじゃないですか。今も同じかなと思っちゃう(笑)。

バラカン そうそう、そんな気がします。たぶん官僚主義、お役所仕事はどここの国でもそうは変わらないんじゃないかな。

帽子に表れる決意

大森 カズオ・イシグロは五歳まで長崎市に住んでいて、移り住んだイギリスで二〇代はじめて『生きる』を見たそうですね。私は佐世保市出身ですが、長崎市は鎖国時代も外国に開かれていた場所なので、江戸時代からの先進的で開放的な雰囲気と、あちこちに残された原爆の爪痕が同居しているんです。

バラカン 僕は彼が長崎を舞台に書いた『遠い山なみの光』を読んでいないからわからないのだけれど、インタビューを読むと長崎のはっきりした記憶は残っていないで、日本映画やマンガをもとに想像した情景と記憶が混ざり合っていると書いていましたね。

大森 そうですね。それでも原題のA Pale View of Hillsは、長崎の雰囲気をもとで表していると思います。佐世保もそうですけど、山の斜面にびっしりと家々が並んで。

バラカン すごいよね、長崎の坂は。彼が長崎にいた同時期の東京の光景は、それこそ『生きる』や、彼が好きだという小津安二郎、成瀬巳喜男の映画から彼の記憶に植え付けられたのでしょうか。

大森 『LIVING』の資料だと、イシグロはロンドン近郊のサリー州ギルフォードで育って、ギルフォード駅からウォータールー駅まで列車に乗って通学していたそうです。ロンドンに向かう車内には山高帽をかぶって傘を持ったビジネスマンがたくさんいて、『生きる』を見てからは映画の官僚たちと列車で見るビジネスマンの姿が重なり合ってしまったみたいです。

バラカン 『生きる』には通勤シーンはないですよ。それはかなり大きな違いかもしれない。

大森 そうですね。階級社会特有の暗黙のルールが明示されるシーンですね。役職が上の主人公だけ別の車両に乗って、新入りの職員が彼に話しかけようとすると同僚に無言で制されたり。バラカン 僕も子どもだったからロンドン中心部に行くことはなかったけど、でも本当に『LIVING』の公務員みたいな人たちはた

くさんいましたよ。彼らがいわゆるボーラーハット(山高帽)をかぶって、ビンストライプのスーツを着て、傘を腕の内側にかけて通勤するイメージは、決して誇張したものではなく、かなり現実に描いていると思う。

大森 デレク・ジャーマン監督やニール・ジョーダン監督などの映画の衣装デザインを手掛けたサンディ・パウエルが、『LIVING』でも衣装を担当しているんですね。彼女はオスカ